

六
だから將來の新社會で、皆が氣持よく忠實に働き、仕掛を十分大きくして機械力を十分に使用し、そして一切の無駄を省いて必要な有益品ばかり生産する事になれば、生産は減少するどころでなく、著しい増大を示す筈である。實を云へば生産力の發達が經濟組織の變革を促してゐるので、新社會が現出してこそ初めて生産力が十分に發展し得るのである。そこで學者の算定した所に依るに、さういふ新社會では、八時間労働どころの段でなく、皆が五六時間か四五時間も働いたら十分だらうと云ふ事である。

して見るに「相當の働き」といふ事を懸念する理由は少しもない。元來一労働命働くといふ事が決して名譽でもなく、手柄でもない。相當な働きで裕かな生活の出来るのが本統の文明でなければならぬ。

但し、經濟組織變革の成行に依つては、過渡期の間だけ一時的に生産力の減少する場合はあるだらう。けれども、それは整理のつくまでの間の事で、根本の理

四

それからナマけたいといふ事は、元來が今日の社會に特殊な心理である。金持は遊んでゐる樂な生活をする。貧乏人は朝から晩まで働いてゐる。食ふや食はずやである。「労働は神聖なり」なき、おだてながら、實際には労働を賤めてゐる。手足の働きといふ事は寧ろ耻辱になつてゐる。長い時間、労働を強制されてゐる。僅かな賃金を貰つて輕蔑される。それではどうかしてナマけたい、少しでもナマけたいといふ心理が生ぜざるを得ない。金持の中にも随分よく働く人があると云ふかも知れないが、それは手足の労働でなく、輕蔑される労働でなく、そして報酬がウンと取れて、休養も出來、贅澤も出來るから譯が違ふ。

然るに新社會では、總ての人が相當な時間、相當な労働をやる。労働は即ち名譽となり愉快となる。ナマけるといふ心理は無くなつて了ふ筈である。